

I 世界は成立していることからの総体である。

- 1 世界は事実の総体であり、ものの総体ではない。 世界—諸事実

II …事実とは、諸事態の成立である。

- 01 事態とは諸対象(もの)の結合である。

事態の構成要素になりうることは、ものにとって本質的である。

他の対象との結合可能性の外にはいかなる対象も考えることはできない。

ものの自立性の形式はものと事態との連関の形式。

- 02 対象は単純である。

世界の実態が規定しうるのは、形式のみであり、実質的な世界のあり方ではない。

世界のあり方は、…諸対象の配列によってはじめて構成されるから。

実体とは、何が事実として成立しているかとは独立に存在するものである。

実体は形式と内容からなる。…… 対象の配列が事態を構成する。

- 03 事態において諸対象は鎖の環のように互いにつながりあっている。

特定の仕方で互いに関係している。

事実の構造は諸事態の構造から成る。

- 04 成立している事態の総体が世界である。

- 06 現実の全体が世界である。

- 1 われわれは事実の像をつくる。

- 12 像は現実に対する模型である。

- 13 像の要素は像において対象に対応する。

- 14 像は、その要素が特定の仕方で互いに関係するところに成り立つ。

- 15 像の要素が特定の仕方で互いに関係していることは、ものが[れと同じ仕方で]

互いに関係していることを表わしている。—構造

…像は現実に到達する。 写像関係は像の要素ともものとの対応から成る。

- 17 像が像という仕方で現実を写しとっているために

現実と共有していなければならないもの、それは写像形式である。

像は、それと形式を共有するすべての現実を写しとれる。

像はその描写対象を外から描写する。

- 18 像が現実を写しとることができるために、現実と共有しなければならないもの、それが論理形式、すなわち、現実の形式である。

すべての像は論理像でもある。

- 19 世界を写しとることができるのは、論理像である。

- 2 像は写像されるものと写像の論理形式を共有する。

- 22 像の真偽を知るためには、像を現実と比較しなければならない。

ア・プリアリに真である像は存在しない。

III 事実の論理像が思考である。

01 真なる思考の総体が世界の像である。

03 「論理に反する」ことを言語で描写することはできない。

1 思考は命題において知覚可能な形で表わされる。

13 命題に属するのは、射影されるものそれ自身ではない。

命題に含まれるのは意味の形式であり、内容ではない。

14 命題は語の寄せ集めではない。 命題が語へと分節化されるのである。

意味を表現しうるのはただ事実だけであり、名の集まりではない。

2 思考は命題で表現される。

思考に含まれる諸対象に命題記号の諸要素が対応する。

20 名は対象を指示する。

22 名は命題において対象の代わりをする。

対象に対してわたしは名を与えることができるだけである。

命題はただものがいかにあるかを語りうるのみであり、

それが何であるかを語ることはできない。

訳注(15)：命題は名だけからなり、名以外の構成要素をもたない。これは、事実が対象だけからなり、対象以外の構成要素をもたないことに対応する。名は対象を指示する。

3 命題のみが意味内容をもつ。

31 表現はそれゆえ、変項を用いて[関数として]表わされる。

33 いかなる命題も自分自身について語ることはできない。

34 定義とは、ある言語から他の言語への翻訳規則である。

IV 思考とは有意味な命題である。

00 命題の総体が言語である。

日常言語は、人間という有機体の一部であり、他の部分に劣らず複雑である。

すべての哲学は「言語批判」である。

01 命題は現実の像である。 現実に対する模型であり、それによって現実を想像する。

記号は明らかにそれが表わすものの似姿である。

レコード盤、楽曲の思考、楽譜、音波、これらはすべて互いに、

言語と世界の間で成立する内的な写像関係にある。

それらすべてに論理的構造が共通している。

02 命題は現実がもつ内的な性質[すなわち論理形式]に従って現実を記述する。

命題は、論理的足場を頼りに世界を構築する。

その構成要素が理解されるとき、命題は理解される。

命題の構成要素だけが翻訳される。

03 命題は既存の表現で新しい意味を伝えなければならない。

命題は状況と本質的に結びついていなければならない。

その総合とは、まさに命題が状況に対する論理像であることにほかならない。

状況はいわば実験的に構成される。

命題の可能性は記号が対象の代わりをするという原理に基づいている。

事実の論理は記号で表わしえない。

訳注(33)：命題と世界は論理形式を共有していなければならない。

1 命題は事態の成立・不成立を描写する。

11 真な命題の総体が自然科学の全体(あるいは諸科学の総体)である。

哲学は自然科学ではない。

哲学の目的は思考の論理的明晰化である。

哲学は学説ではなく、活動である。

哲学の仕事の本質は解明することにある。

哲学の成果は「哲学的命題」ではない。諸命題の明確化である。

認識論は心理学の哲学である。

記号言語に関する私の研究は、…思考過程の研究…

哲学は自然科学の議論可能な領域を限界づける。

哲学は思考可能なものを境界づける。それによって思考不可能なものの境界も。

12 命題は現実をすべて描写しうる。しかし、現実を描写するために命題が現実と共有せねばならないもの——論理形式——を描写することはできない。

命題は論理形式を描写できない。論理形式は命題に反映されている。

命題は現実の論理形式を示す。

論理を正しく把握するようになるには、われわれの記号言語においてすべてがうまくいきさえすればよい。

2 命題の意味とは、事態の成立・不成立の可能性と命題との一致・不一致である。

22 要素命題は名から成る。それは名の連関、名の連鎖である。

25 要素命題が真ならば、その事態は成立している。

26 すべての真な要素命題の列挙によって、世界は完全に記述される。

4 命題は、要素命題の真理可能性との一致・不一致を表現したものにほかならない。

44 「論理的对象」は存在しない。

命題が自分自身について真であると語ることはできない。

5 ひとが予見不可能な(すなわち構成不可能な)形式をもつ命題など存在しない。

V 命題は要素命題の真理関数である。

13 現在の出来事から未来の出来事へと推論することは不可能。

因果連鎖を信じること、これこそ迷信にほかならない。

未来の行為をいま知ることはできない。ここに意志の自由がある。

15 確実性に欠けるところでのみ、われわれは確率を必要とする。

2 諸命題の構造は互いに内的関係にある。

- 21 この内的関係に照明を当てるには、命題を操作の結果として、すなわち、他の諸命題（操作の基底）からその命題を構成する操作を施した結果として、表わせばよい。
- 23 操作がはじめて登場しうるのは、…諸命題に対する論理的構成の始まるどころ
- 24 操作は、形式を特徴づけるのではなく、ただ形式の差異だけの特徴づける。
- 25 操作の結果だけが語るのであり、そしてそれは操作の基底に依存している。

3 すべての命題は要素命題に真理操作を施した結果である。

- 45 論理においてはすべてはひとつひとつ自立している。
論理には、より一般的とか、より特殊といったことはありえない。
- 47 要素命題のうちに、すでにしてあらゆる論理的操作が含まれている
構成されたものがあるところには、入力項と関数がある
言語自身があらゆる論理的誤謬を避ける
論理がア・プリアリだというのは、論理に反しては思考不可能ということ
- 51 論理はすべてを包括し、世界を映し出す。
肯定命題は否定命題の存在を前提にせねばならないが、しかし逆もまた成り立つ。
- 52 対象が与えられるときは、同時にすべての対象が与えられる。
要素命題が与えられるときは、同時にすべての要素命題が与えられる。
あるシンボルの説明を与えるものはシンボル自身のうちに存している
- 54 一般的な命題形式では、命題は真理操作の基底としてのみ、他の命題中に現われる。
「Aはpを信じている」「Aはpと考える」「Aはpと語る」は、もとをたどれば、
「p」はpと語る」という形式となる。

訳注(82)：思考主体や信念体系なるものは、世界の中の一対象ではない。像「p」がpである
という事実を語っている意味論的關係こそが、思考や信念の中核を成すということ。

このことは、魂——主体、等々——などありはしないことを示している。

集合的なものを知覚するとは、その構成要素がお互いにかくかくの関係にある
ということを知覚することにはかならない。

- 55 論理によって決定される問いは、論理のみによってすべて決定されねばならない。
論理を理解するためにわれわれが必要とする「経験」は、何かがかくかくである
というのではなく、何かがあるというものである。
世界が存在しないとしても論理があるというのだとすると、世界が存在するときに
どうして論理がありえようか。
経験的実在は対象の総体によって限界づけられる。
限界は再び要素命題の総体において示される。

6 わたしの言語の限界がわたしの世界の限界を意味する。

- 61 言語は世界を満たす。世界の限界は論理の限界でもある。
思考しえぬことをわれわれは思考することはできない。

- それゆえ、思考しえぬことをわれわれは語ることもできない。
- 62 世界がわたしの世界であることは、この言語(わたしが理解する唯一の言語)の限界がわたしの世界の限界を意味することに示される。
世界と生とはひとつである。
- 63 わたしはわたしの世界である。
思考し表象する主体は存在しない。
主体は世界に属さない。それは世界の限界である。
世界の中のどこに形而上学的な主体が認められうるのか。
われわれの経験のいかなる部分もア・プリオリではない。
- 64 独我論を徹底すると純粋な実在論と一致することが見てとられる。
独我論の自我は広がりや欠いた点にまで縮退し、自我に対応する実在が残される。
自我は、「世界はわたしの世界である」ということを通して、哲学に入りこむ。

VI

- 1 論理学の命題はトートロジーである。
- 11 論理学の命題は何も語らない。(それは分析命題である)
- 12 論理命題は世界の足場を記述する。むしろ、それを描き出している。
名が指示対象をもち、要素命題が意味内容をもつことは、論理命題において前提されている。そしてそれによって、論理命題は世界と結びついているのである。
論理は記号を本質的に必要とし、その記号がもっている本質的特性それ自身が、自ら語るものである。それゆえ、ある一つの記号言語の論理的構文論を知るならば、(すべての記号言語に共通する)論理学の全命題を手にすることになる。
論理命題の証明とは、一定の操作をくりかえし適用することによって、当の論理命題を別の論理命題から作成することにほかならない。 *これが認識?
論理学の命題は、いずれも、記号で表わされた推論図式にほかならない。
論理学では各命題が自分自身に対する証明になっていると解釈してもよい。
- 13 論理学は学説ではなく、世界の鏡像である。 論理は超越論的である。
訳注(101)：この世界に対して超越的でありつつも、なお、この世界がこのようであるために要請されるもの、それが「超越論的」と言われるものである。
論理はそれ自身を語ることはできないが、世界を語るために(そしてまた世界が語られたようにあるために) 不可欠なものであり、「超越論的」なのである。
- 3 論理学の探求とは、[可能な]すべての法則性の探求にほかならない。
そして、論理学の外ではいっさいが偶然的である。
- 31 いわゆる帰納法則は、論理法則ではありえない。明らかに有意義な命題だから
- 32 因果法則とは法則ではない。法則の形式である。
物理学においては、いくつもの因果法則、すなわち因果形式の諸法則が存在する。
ひとは、なんらかの「最小作用の法則」があるに違いないと、予感していた
ア・プリオリに確実なものは純粋に論理的なもの、と分かる。
- 33 われわれは一つの保存法則をア・プリオリに信じるのではない。
一つの論理形式の可能性を、ア・プリオリに知るのである。

- 34 理由律、自然の連続原理、自然の最小消費の原理、等々は、科学の命題に与えうる可能な形式をア・プリオリに洞察したもの
力学とは、世界記述に必要とされる真な命題のすべてを、一つの計画に従って構成しようとする試みである。
物理法則もまた、その論理的な仕組みの全過程を経由したところでは、世界の対象について語っている。
- 35 理由律などの法則は網に関するものであり、網が記述するものには関わらない。
- 36 ただ法則に従った連関のみが思考可能である。
記述されること、それはすなわち起こりうることである。
そして、因果法則が許容しえないものは、すなわち、記述されえないものである。
- 37 存在するのはただ、論理的必然性のみである。
現代の世界観はすべて、その根底において、いわゆる自然法則を自然現象の説明とする誤りを犯している。神と運命の前で歩みを止めるように世界はわたしの意志から独立である。
たとえ欲したことすべてが起こったとしても、いわば単なる僥倖にすぎない。
意志と世界の間にはそれを保証するいかなる論理的連関も存在せず、…
- 訳注(109)：ウィトゲンシュタインは、時間・空間・因果が形式であることについてカントに賛成しつつ、それらをすべて記述の形式とみなす。

4

- 41 世界の意義は世界の外になければならない。
世界の中ではすべてはあるようにあり、すべては起こるように起こる。
価値の名に値する価値があるとすれば、それは、生起するものたち、かくあるものたちすべての外になければならない。生起するものもかくあるものも、すべては偶然だから。
- 42 それゆえ倫理学の命題も存在しえない。
命題は[倫理という]より高い次元をまったく表現できない。
ある種の倫理的賞罰というものは、あらねばならないのである。ただし、それは当の行為それ自身のうちにあるのでなければならぬ。
(そしてまた、賞が快であり、罰が不快であらねばならないことも、明らか)
倫理的なものの担い手たる意志について語ることはできない。
- 43 善き意志も悪しき意志も、言語で表現しうるものを変化させることはできない。
変えうるのはただ世界の限界であり、事実ではない。ひとことで言えば、そうした意志によって世界は全体として別の世界へと変化するのでなければならぬ。
- 44 神秘とは、世界があるというそのことである。
- 53 語りうること以外は何も語らぬこと。自然科学の命題以外は——それゆえ哲学とは関係ないこと以外は——語らぬこと。
誰か形而上学的なことを語ろうとする人がいれば、そのたびに、あなたはその命題のこれこれの記号にいかなる意味も与えていないと指摘する。これが、本来の正しい哲学の方法にほかならない。

訳者である矢野茂樹の考えで目についたこと

- 一： 言語の限界を明らかにすることによって思考の限界を示そうとしている。
- 四： 思考が世界の可能性を捉えることであるならば、思考とはまさに像である。
「心」とか「意識」といった言葉で連想されがちな非物理的な何ものかを想定してはならない。思考もまた、この世界に起きたある事実が、他の事実を表現することによって成立するものにほかならない。『論考』が明らかにしようと狙う思考の限界は、像の限界、すなわち言語の限界と厳格に一致する。
- 五： 対象の論理形式は、命題における名の論理形式として明らかにされる。
名の論理形式——対象の論理形式が明らかにされ、名が何を意味するかが明らかにされる。
- 七： 基底に対する操作。真理操作の基底は要素命題。
真理操作は何を基底にするかにかかわらない。経験に依存しない。
どのような要素命題が真理操作の基底として与えられるかは、経験に依存する。
要素命題は名から成り、名は対象を表わす。対象はわたしが経験した事実から採られる。
完全にわたしの経験に依存しているのは名と対象の対である。
名の可能な組み合わせたる要素命題もまた、わたしの経験に依存する。
言語が「わたしの言語」として特徴づけられる。
言語の限界を定めるものは、操作ではなく、その基底にある。
「どれだけのことが考えられうるか」という問いに対する答えは、わたしがどのような事実を経験しているのかに決定的に依存するものとなる。
他者＝わたしと異なる経験をもっている。異なる論理空間
異なる論理空間をわたしの論理空間のうちに位置づけることは、不可能である。
- 八： 『論考』の叙述を「幸福」に狙いを定めたものとして読み直すことは可能である。
世界は「わたしの世界」として現われる。
わたしの世界は「生きる意志」に満たされなければならない。
世界を積極的に引き受けていこうとする意志。
『草稿』に「幸福に生きよ」という言葉があるらしい。

ラッセルの解説の訳注：日常言語は論理的に完全である、とウィトゲンシュタインは考えている。